

空母「鳳翔」

伊第一五七号潜水艦

航空・水中特攻隊と共に

兵庫県 池野 安 一

「池野さんは海軍の空母と潜水艦の勤務をされたといわれるが、志願されたのですか。」

私は昭和十七年、満十九歳に志願して呉の海兵団に入りました。乗り組んだ艦は大正十一年建造の日本初の航空母艦「鳳翔」でした。九七式艦上攻撃機を積んで、小笠原と沖繩の中間で訓練をやった。「鳳翔」は戦備は劣っているが訓練艦としては随分活躍していた。

私は機関科のため常時艦の底にいたが、時々甲板に出た。甲板では、艦載機が船橋に激突したりして、発艦より着艦の方が事故が多かった。甲板には動索ワイヤーが二、三本張つてある。艦載機にはフックがつい

ていて、それを引っかけ止める。

戦闘配置になると私達は全部機関部（底）に入る。

私は機関科の分隊長の伝令として指揮所にいた。そこで航海日誌や機関日誌を全部書く専門部署だった。機関科の者は、敵機の攻撃があつても底にいたので状況が見られない。それより、味方の犠牲を後からみるのが悲しい。

沈んだ時は上まで上がつて来られない。小破ならいいが、大破や沈没では死ぬことが多い。「鳳翔」は銃爆撃を受けたが大きな損傷は無かった。

昭和十八年六月、横須賀工機学校へ入学した。平時は六ヵ月だが、我々の時は戦時体制で四ヵ月だった。

この時、特殊兵として専門部署が決まる。続いて十月一日、工機学校から潜水学校へ入った。潜水学校では潜水艦乗員として訓練と厳格な勤務選定がある。上官も部下も身をついにしないと潜水艦勤務はできない。今と違つてその時の操行は手でやった。だから「なだしお」の事故を思うと今昔の感がある。

潜水艦では一人の叛乱者が出れば乗員百人の生命を

奪ってしまふ。上下心を一つにしなければならぬのだから他の艦とは異なる。しかし、給与、食料は航空隊以上である。潜水学校を出ると、勤務が自動延長して、一年六カ月の義務年限がある。

—いよいよ潜水艦勤務ということですが、何号の潜水艦に乗ったのですか。

昭和十九年五月一日、伊号第一五七号潜水艦勤務を命ぜられました。伊号第一五七号は、開戦時から十七年五月までは伊号第五七号でしたが、新しい伊号第五七号が竣工就航したので伊号第一五七号となったのです。新伊号第五七号は海大三型で、排水量千六百五トン近くある。長さ百一メートル、速力二十ノット、水中八ノット、十二センチ砲一、魚雷発射管は艦首六、艦尾二というのです。

伊号第一五七号の前歴は、ミッドウェー海戦、アッツ島玉砕時のキスカ島撤収にも参加した。その時無理な使い方が多かったためか故障個所が多かった。十八年の終りごろからは潜水練習艦となったが、十九年四月二十日、第三十四潜水隊となり、実戦部隊（第六艦

隊）となった。

海戦は大艦巨砲主義から、主力は航空機と潜水艦となった。伊号第一五七号は四月二十日から五月二十五日の一ヵ月舞鶴にいたのですが、米軍には電探があり、日本潜水艦が出港すると直ぐ知られてしまう。そのため艦にゴム、ラテックスを塗ってそれを防いだ。

その後、艦の構造を改造して回天（人間魚雷）の搭載艦となる。回天を搭載して特攻に出発する。十九年の終りごろ、黒木大尉や二科大尉の考案である。

—「回天」特攻についてお話をして下さい。

「回天」は丸六金物といわれ、一人乗りで自由自在に人間が操縦できる構造である。長さ一四・五メートル、直径一メートル、重量八トン、速力三十ノット、航続距離二千四百メートル、炸薬一・六トンは頭部に詰めてある。

自分で敵の艦船を追いかけられるが、搭乗員は帰還できない。搭乗員は予科練、予備学生が主で、「回天」作戦参加者は二千人余であったが、実際に散華した人は百四十四人と覚えている。

敵艦に向かつて第一回特攻隊が出発したのは、昭和十九年十一月八日ごろと思うが、四国・九州を基地として本土決戦に備えた。実際に大型艦船を沈めたかは、よく判らない。

伊号第一五七号から直接特攻隊員を送り出さなかったが、高知県の宿毛や須崎の基地から基地へと送る役目をした。訓練は瀬戸内海の徳山沖でやった。敵が内海へ入る前に攻撃するので、基地が四国や九州に設けられた。

潜水艦は輸送のみでなく、敵艦も攻撃するが、「回天」搭載の場合は潜航はできない。輸送中幸い空襲を受けなかったが、呉軍港で爆撃を受けたことはある。爆撃を受けるときは露頂潜航、全没潜航でなく海底に沈座して空襲をまぬがれた。呉では、浮上してみたら戦艦「日向」や「伊勢」が底着していた。沈座している時は泥の中だから排気できない。その時は呼吸が困難になる。空気の味をはじめて覚えた。深呼吸したあの時の空気の味や気持は潜水艦乗りでなければ判らない。

当時戦況は悪化して、主力艦艇もやられる。米艦が近海まで来ているので、我々潜水艦が主力艦になってしまった。最後の行動、七月十二日から八月四日、呉を出発、「回天」を降ろし、日本近海の索敵行動を続けた。このときは小笠原まで行ったので長期行動となり、食料、燃料を余計積んだので内殻九メートル、その中に機械、電気室などあり、通路は細くなる。犠牲者が多い中で最後まで生き長らえられた幸運の艦である。

潜水艦は敵の雷撃以外、艦同志の激突事故も多かった。

終戦となったが信じる者はいない、「戦争継続、一兵たりとも戦う」というピラが撒かれた。我々もやるといつていた。潜水艦では特攻「回天」を運んだ我々だ、海戦で、空戦で、陸戦で多くの戦友の死をこの眼で見ていたのだから。

一死以って報恩の誠を尽さんと我が艦も意を決し、七度人間と生まれて国に報いんと決意したのです。「回天」菊水特攻隊着用の「七生報国」の鉢巻を今も持つ

ています。

戦後の八月二十九日、一時帰休、

九月一日、即時帰港命令を受け大村回航、

二十年十一月十九日、回航残務整理、解除復員。

二十一年四月、伊号第一五七号海没処分。

このようにして私も復員。潜水艦も処分させられ、私の戦争は一応終結をとげた。

ソロモン「せ号」作戦

必死の機動舟艇隊

北海道 高橋 義平

―高橋さんの略歴を見ますと、現役で海軍に徴集されていますが、昭和十五年十二月一日ですか、横

須賀海兵団入団の十六年一月十日ですか。

私は大正九年八月十五日、福島県で生まれました。

北海道から福島に集り、海軍の人に引率され、東京品川の旅館に一泊して海兵団に入団したのですが、昭和

十六年一月十日でした。

海兵団での基礎教育を終って筑波海軍航空隊に入隊は四月十五日、そこで三等機関兵となったのです。海兵団も航空隊も訓練は極めて厳しく、海軍魂も基礎技術もたたき込まれました。

―十七年二月に、第二号艦機装員付とありますが、それが戦艦「武蔵」だったのですか。

私は筑波海軍航空隊から、有馬事務所転属という命令を受け、何だか判らず指定されるまま長崎の波止場へ行きましたら、海軍の腕章をした人がいて、転属した私ともう一人はランチで対岸のバラックへ案内されました。

そこは長崎ドックなのです。二号艦とは戦艦「武蔵」なのです。「武蔵」の四囲は棕櫚の、網というかすだれのようなもので覆われ、外からは見えぬようになっていました。有馬事務所は、艦長有馬大佐の名をとった防諜名だったわけです。

「武蔵」の建造は極秘、機密秘というか、親兄弟にも絶対に話さぬ、万一漏洩すれば厳罰に処せられると